

# ギアリンクス便り 第16号 2008年02月発行

〒505-0051 岐阜県美濃加茂市加茂野町鷹之巣 343

ホームページ [www.gialinks.jp](http://www.gialinks.jp)

代表取締役 中田智洋 (株)サラダコスモ

取締役 大西 隆 (有)セントラルローズ

取締役 桜井芳明 桜井食品(株)

取締役 渡辺好弘 チュウノー食品(株)

取締役 加藤孝義 (株)岐孝園

監査役 渡辺基成 渡辺会計事務所

## 現地ツアーのご報告

ギトー食品(株)

山田 敦史

アルゼンチン農業ツアーに今回ギトー食品(株)で初めて参加させていただきました。

ツアーのお話をいただきましたのは、2ヶ月程前で社長から「今、使っているパラグアイ産の大豆を見てこい。」とだけの説明でした。私は、この時は、単純に「パラグアイ産大豆は、どんな場所、環境、人々が作っていて、今年のできは、どうだろうか?」という思いで、参加いたしました。しかし、実際のツアーは、まったく違い感動の連続と自分を見つめ直すことのできるとても素晴らしいものでした。

それは、ツアー初日の説明会から始まりました。事前の説明会で、自己紹介をした時ほとんどの方々が、社長であったり取締役をされていてわたしなんかうまくツアーをしていけるか不安でした。しかし、成田での説明会に始まり、アルゼンチンに到着するまでには、その不安も解消されていました。日頃の生活でお会いしたらとても声もかけられない方々に大変親切にしていただけ、さらには今までの人生経験をお聞きすることができたからです。ツアーを通して、お話を色々な方からいただきこれからの私の人生の目標や考え方、物事の本質等々色々学ぶことができました。33年間で、これほど、多くの時間自分を見つめ直しこれからの目標と生き方を考えたことはありませんでした。

アルゼンチン到着後、初日の夕飯は、タンゴショーを観ながらでしたが、ここでも素晴らしい感動がありました。まず、ステーキの

ボリュームに圧倒されそしてタンゴのすばらしさに圧倒されましたが一番の感動はフィナーレにありました。アルゼンチンの国旗が垂れ幕の様に降りてきてフィナーレを向かえますが、国旗が現れると共に、国民が総立ちになり、敬礼のようなポーズをとり、拍手で終わります。これが日本であったなら、ただの拍手にすぎないと思います。アルゼンチンの人々の愛国心に感動をおぼえると共に、日本を考えさせられました。

そして、パラグアイ、日系人の方々がジャングルだった土地を切り開き、あたり一面にトウモロコシや大豆畑が広がる昔の日本人のたくましさに感動いたしました。今の日本人でどれほどの人がここまでたくましく生活をされているだろうと考えさせられ、さらに自然の偉大さ、すばらしさに感動いたしました。イグアスの滝。アンデスでは、大地は無数のホテル、大空には星々。人間の都合、便利さ(生活)により日本では失ってしまったものが数多くあり、本当に守るべき物事とは何かを痛感いたしました。

このような素晴らしいツアーに参加させていただけたすべての皆様に感謝の思いで一杯です。これからの私の人生にとって大変意義のあるツアーになりました。この思いを実行、実現していきたいと思っております。誠にありがとうございます。

日本から最も遠い国で輝いている人と語り、本物の畑を見た！ 池端 絹代

「爆発する世界の人口と急増する穀物需要。そして異常気象が暗示する地球の限界。

“スーパーから食べ物が消える”のはそう遠くない」と「超食糧危機（第二海援隊出版）」のまえがきにある。そんな日本の食糧危機に備えて、食糧確保に取り組んでいる会社ギアリンクスの“第7回農場ツアー”に心を震わせ参加した。参加理由は簡単。■自分の目で「本物の大豆の畑」を、見たい。■現地の日系移住者と交流ができる。この二つの情報を得た瞬間に参加を決めた。遠い近いは関係ない、幼いころから「海を漂う軽石みたいだ」と言われた私の好奇心旺盛さは年を重ねても変わらなかった。

出発から三日目

アルゼンチンからパラグアイに渡る際、バスを降りてブラジルを含め川による三国の国境をフェリーボートで通過した。既にボートに乗っているも「フェリーは何処？」と声が上がったほど素朴なボートであった（トヨタのワゴン車3台も同乗し、フェリーの機能は充分だった）

パラグアイの「イグアス農業協同組合」の事務所でパラグアイの概要と組合の状況について説明を受けた。夜、日系移民新年会で、婦人会の方手作りの海苔巻き、刺身、おにぎりなど食べつくせない位の日本料理の美味しさに参加者は喜び愉しみ語り合い感謝した。

その会場でご両親が鹿児島県出身、2世の山下卓一さんとお話できた。彼は大口市が故郷、私はそこから車で1時間の始良町、当然以前から知り合いのように話はずむ彼は1957年にパラグアイに生まれ、高校を卒業時に「日本に行きたい」と父にお願いした。しかし、旅費を出して貰えず断念したとの事。「子供の頃思われたことで現在も覚えている事がありますか？」の私の問いかけに「どうしてこんなジャングルに来たのか」と両親に聞いたと応えて下さった。両親は真っ暗で20～30mの木々が茂る中、1本1本全て手作業で切り拓いていかれたという。私はその頃に想いを馳せるが、絶するに値する毎日の連続だったのだろう。しかし人間って凄いことができるんだ。協力し合えば・し続

ければ・あきらめなければ叶えられると。彼は「今は良いですよ」と締めくくった。翌朝、イグアス日系農場や施設を見学した。以前、北海道エコツアーで味わった「畑の端にいる人が確認できない」状況どころではない。見渡す限り地平線まで続く大豆畑。生産過程に次のような工夫と改善を重ねたと語られた。

①雨に表土が流されぬよう不耕起にする。結果、エネルギー使用や労働時間の短縮に繋がった。

②地中の温度が60度位になり有機物は直ぐ分解されるため、作物残渣はすき込まず表土に置き肥料にする。

このようにして産まれた大豆が加工され、味噌、醤油、豆腐、大豆油と形を変え私たちの口に入っている。改めてきれいに食べつくさねば罰が当たると思った。

○小麦製粉工場では、小麦を保管する際、水分を下げ、乾燥するための燃料が積み上げられていた。薪である。エネルギーまで自給自足である。努力と人力、環境の豊かで現在の状態が保たれていた。

○太鼓道場に於いて、太鼓の材料の木も皮も地元産。プラス、人の知恵と技術と前向きさで隣国ブラジルにも太鼓ブームで販路があると言う。語ってくれた細見の若者の笑顔に頼もしさ爽やかさを感じずにはいられなかった。

又、アメリカがエネルギーをバイオエタノールに頼る政策を打ち出した結果、中国インドの人口増もあり、とうもろこしなどの需要が増加。インドから調査団が訪れ「大豆油が欲しい。肉は食べないので家畜の飼料は要らない。滓は要らない。」とはっきり主張しているという。このはっきりさが日本にも必要だと強く思った。

日本から最も遠い地を訪ね想ったことは、これまでの私の人生で悩み悲しみなんてほんのちっぽけな事。さあ、後何年生かされるか判らないが地に足つけて一歩ずつ歩き続けようと。何をするかは、じっくり仲間や家族と相談が必要かも。そして日本国民一人ひと

りがしっかり考え生活した上で、将来を見据えた国政の在り様にも注視していきたい。

『かがり火』 発行人 菅原 敏一

パラグアイのイグアス農協の2階フロアの壁面には、1960年代に日本から入植した人たちの写真が揚げられていた。

ジャングルを切り拓き、巨木を倒し、搬出し、切株を取り除き、しばしば毒虫に苦しめられながら耕作地を広げていった。

重機を持つ余裕の無かった移住者にとっては〇〇に尽くし難しい重労働であったに違いない。ただ〇〇に写っている人たちはおらかな笑顔を浮かべていて非愴感は感じられない。戦前、国内では暮らしが成り立たず、海外に生活の拠点を求めるしかなかった人たちとは時代と状況も違っているのだろう。

彼らが開拓したジャングルは今では肥沃な大地となって見渡す限りの大豆畑やトウモロコシ畑となっていた。

その夜、日本人会の婦人部の人たちは日本食でわれわれをもてなしてくれた。すし、おにぎり、焼きそば、冷奴、タケノコ、ワラビ、こんにゃく、漬物・・・いささか肉のかたまりに食傷気味だったツアー一行は生き返る思いだった。聞くと移住者たちは100%和食だという。ごはんのみそ汁で過酷なジャングルを開拓してきたのだから和食の持つパワーも捨てたものではない。

イグアス農協の組合員は95名、一人当たり耕作面積は450ヘクタール平均粗収入は17万ドル。日本の農家と比較すれば抜群の高収入だけどそれは穀物相場が高騰している近年の話で、60年代の70年代は苦しい生活が続いたという。

組合員の一人、久保田洋史さんによれば、「よくなったのはここ数年ですよ。逆境に耐えきれず、他の土地に移ったり、日本に行った人も多いので、残っている人は3~4割というところじゃないでしょうか」と言う話だった。

そんな視察を重ねている時に、ギョーザ事件のニュースが飛び込んできた。同じ偽装でも国産と輸入食品では深刻さが違う。食糧自給率が40%を切っている我が国ではこれからもこのような危険にさらされることだろう。

ところで、南米の日系農家がつくる農産物は純粋に海外農産物だろうか。海外でつくっているのだから国産ではないのは確かだけれど、祖国への想いを抱きながら日系の農業者がつくる農産物は気持ちの上では粉はメイドインジャパンではないかというのがギアリンクスの考え方であるようだった。少なくとも〇〇がつくっている農産物には未知なる人がつくっているものよりも安心感がある。

アルゼンチン、パラグアイの日系農家がつくる農産物を〇〇的に輸入できるとシステムが確立されれば、彼らにとっても日本の食糧事情にとっても〇時のあることだろう。

一人でも多くの日本人にこのことを知ってもらいたいとギアリンクスはこれからも視察ツアーを実施するという。

アルゼンチン農場見学ツアーに参加して

菊本 和男

今回のギアリンクスツアーは私にとって刺激いっぱいツアーでした。

成田からワシントンを経由してブエノスアイレスまで約31時間の超ロングフライト。色々な事を考え思いめぐらせる時間となりました。

真冬の日本から真夏の南米へ、先ず感じたのはアルゼンチンは遠く日本からの地の果てかと。

その地に多くの人が日本から移住者として移住され現在もその地に残って逞しく生活されている方が多数おられます。

我々の想像も出来ない苦難の連続を乗り越えてこられたことでしょう。

今回、イグアス移住の方々、在住岐阜県人会の方々、アンデス移住家族の方々との交流会

さん、本当にありがとうございました。

がありました。お話を伺う中、現在も日々努力を重ねてられることや、日本では希薄になってしまった、地域や隣人との助け合いやつながり家族の絆、家庭の温かさが感じとれます。改めて、私たちの大切なものを考えられた思いです。

ツアーの旅程はブエノスアイレスを基点に、空路イグアスに向かってパラグアイとバスで入ってイグアス日系農協と農場へ、アルゼンチンに戻って、イグアスの滝の観光をして空路ブエノスアイレスに戻って、バスでギアリンクス農場を経てアンデス移住先へ、片道1,000kmの旅で途中ホテルの海を鑑賞するというものでした。

どれもこれも大自然の雄大さを目の当たりとして体感するものばかりです。

イグアスの滝の観光では上からはトロッコ列車に乗り遊歩道を歩いて最大の滝「悪魔ののど笛」へド胆をぬく迫力を巨大なパワーに圧倒された後、下からはボートに乗って滝を仰ぎ見ながらそのまま滝に突っ込んで行くという、あたかも修験道者の滝業のごとく、全身を清め長年こびり付いた雑念や汚れをたたき落とした様な強烈な体験でした。

ツアーの〇〇ライト、ギアリンクス農場の視察も、実際に現場に立つと、ギアリンクスの理念を掲げた看板が眩しく輝き、青々とした農場の広さとスケールの大きさに驚かされます。ここまでの農場に育て上げた中田社長とギアリンクスの方々の志の高さと信念を実感しました。その高い志に移民された方々が協力を惜しまないということもこの地に来て確信できます。11日間の旅で自然の雄大さと、人は自然の一部で生かされている存在であることに気づき、高い志を持って未知の世界に突き進んで行くチャレンジ精神が大切であることを学びました。感謝を忘れず、目線を上げて志高くチャレンジ精神を持って日々行動委して行こうと思います。またチャンスがあれば参加したいです。

このツアーでは、中田社長御夫妻、桜井社長に本当にお世話になりました。また現地では青木さんに送り出して頂いた喜田先生、村上